2024年2月11日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

光へ招かれる方

［ヨハネによる福音書9章1～7、35～41節］

さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。わたしは、世にいる間、世の光である。」こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして、「シロアム――『遣わされた者』という意味――の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。

イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」

[1]　 アメイジンググレイス―「かつては盲目だったが、今は見える」

先程ご一緒に歌った讃美歌は、「アメイジンググレイス」として多くの方に知られ、世界中で歌われている讃美歌ですね。ただ、美しい旋律の方が広く用いられて、歌詞の方を丁寧に紹介されるということは少ないと思います。しかし、これは歌詞が本当に素晴らしいです。元は英語の詩です。後に牧師になったジョン・ニュートンという英国人（彼はかつては奴隷の売買を仕事としていた人物です）が、自分の信仰の告白・証しとして作った讃美歌なんです。『新生讃美歌』では日本語に訳していますが、元の英語の歌詞を直訳するとこのような歌詞です。第1節。

「驚くほどの恵み　何とやさしい響きか　私のようなみじめな者でさえ救われた。

かつて私は失われていたが、今見出された。 かつては盲目だったが、今は見える」。

「驚くほどの恵み」が、「アメイジンググレイス」です。そして、「かつて私は失われていたが、今見出された。 かつては盲目だったが、今は見える」という部分の英語は、 ”I once was lost　but now am found　Was blind but now I see”となっています。キリスト教信仰が言う「救い」とは正にこのことですね。失われていたこの私を、神様が見つけ出して下さった。盲目だったこの私の目を神様が開いて下さった。その事実を、ジョン・ニュートンは自分の体験として、讃美歌にしたのです。

[2] 「神の業が彼の上に現れるため」

　「かつては盲目だったが、今は見える」、その歌の通りのことを、イエス様によってして頂いた人の物語、それが先ほど読んで頂いたヨハネ福音書の9章では、丸々一章全体を通して記しています。皆さんよくご存じの箇所だと思いますので、物語そのものを追いながら説明することは省かせて頂いて、私自身が今回、この箇所を読んで導かれたことなどを分かち合わせて頂きたいと思います。

　9：1～3をもう一度見てみましょう。「さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」

　ある生まれつきの盲人がいて、彼は、後の8節には物乞いをしていたこともあったとありますから、この日も道端で施しを求めて座っていたのかも知れません。皆さんはどう思われますでしょうか？私は、一体彼はどのような心でこれ迄生きて来たのか、またこれからの人生を考えていたのか、想像してみるとその闇の深さに恐くなります。一人でも友人がいたら生きる支えにもなったと思いますが、恐らくは孤独であり、もしかするとその孤独にも慣れっこになってしまっていたのかも知れません。生きる喜びもなく、望みを持つなどということはかえって苦しいだけで、死に向かって行く時間にただ身を任せながら毎日毎日を過ごしていたのでしょうか。しかも、彼は耳は聞こえる訳です。むしろ聴覚は敏感だったかもしれません。彼の耳に聞こえてくる声は、「この人がこうなったのは、彼か、彼の先祖の罪の結果なんだね」というような絶望的な言葉でした。何度そのような救いようのない言葉を彼は聞いたことか…。この日もイエス様の弟子たちが道端の彼の姿を目にし、イエス様から教えて頂こうと聞いた言葉もそうでした。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」。あぁ、またかと盲人は思ったことでしょう。しかしイエス様の口から出た言葉は、これ迄彼が聞いたことのない言葉でした。「イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」。―光が射すとは正にこのこと。何々が原因だとか、呪われているとかそんなことは一切語らず、ただ「神の業が彼の上に現れるため」とだけ語る、こんなことを語れる人は一体誰なのだ？と思っていたら、その人が自分に触れ、両目に地面の土をこねたものを塗ってくれて、シロアムの池に行って洗いなさい、と直に命じて下さったのです。彼は命じた通りにしました。独りで行ったのかどうかそれは分りませんが、行って目を洗うと、彼の目は開け、闇から光の中でこの世界を生きる者へと変えられて戻って来たのです。

　しかし、ヨハネ福音書では、これは第一幕なのです。彼は光の中に入ることによって、むしろ座り込んでいられなくなりました。周辺がざわついた。彼は引っ張り出され、自分の身に起こったことをあるがまま語るように導かれていったのです。彼の目が開かれたのが、労働が戒められている安息日であったために、ファイサイ派の者たちから一体誰がお前の目を開けたのか？と尋問されますが、彼はイエスという名前も知りません。25節で彼が尋問に答えている言葉はこうです。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです」 。これは“証し”の言葉ですね。ジョン・ニュートンと同じです。「目の見えなかったわたしが、今は見えます」！

　私は、私たちの信仰というのはこの一点に尽きるのではないか、これを読んでそう思いました。信仰が与えられているということ、それは今、肉眼で見ている世界とは違う景色を見せられて生きているということだと思います。では、何が見えてくるのでしょうか。「私の前に、或いは傍らに、イエス様がいる」という事実が見えてくるのだと思います。この癒された人は、ファリサイ派の追及もあったり、彼の家族もどこか彼を見捨てているような感じも受けますし、こともあろうに目が開かれた結果、住んでいた場所から追い出されてしまったのです。…しかし、そこで何が起こったでしょうか。35節からをご覧下さい。

「イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」―彼は今、主イエスだけを見、拝しています。これが彼の本当の救い、そして私たちの救いなのではないでしょうか？この物語は決して彼だけに起こった特別な物語ではないのです。神様を知らず、目先の生活に追われ、生きる屍のように自分の人生を浪費していた者、自分では目が見えていると言い張り、しかし実は盲目だった者が、神様によって見出され、声を掛けられ、礼拝する者へと導かれた証しの物語なのです。

[3] 「You　are　invited」―神様からの招きがあなたにある！

この癒された人ですが、盲人だった時も、まず主イエス様が目を留めて下さいました。そして35節にあったように、追放された彼に再びイエス様は出会って下さったのです。イエス様は私たちの生きる苦しみを知り、私たちと共に歩んで下さるのです！それどころか、私たちを罪に断罪する力よりもこのお方の愛は大きいのです！健常者であろうがなかろうが、神様の前には誰もが罪人です。私たち、神様の招きを聞く耳を持ちませんでした。いや、必要ないと思ってきました。しかし、イエス様の方から私たちに近づき、私たちを神の国の住人とするために、十字架で神様との和解を私たちに代わって成して下さったのです！十字架上の主の開かれた御腕は、闇の中に座り込む者に対しての、“ここに光がある”との招きです。

　外国で働く日本人宣教師の話です。教会の傍の道行く人々に、その表に御言葉、裏に教会案内のカードを手渡しています。その時、小さく声をかけることがあると言うのです。それは「You　are　invited」（あなたに神様からの招きがあります）と語るんですと。そうか！と思いました。私たちは皆、神様に呼ばれて教会に導かれた、そしてバプテスマを受けた。神様は全ての人を招いておられます。イエス様が「囲いの外の羊も私は導かねばならない」（ヨハネ10:16）と言われた通りです。

「アメイジンググレイス」の元の英語歌詞の6節は、訳すとこうなっています。「世界はやがて滅び　太陽も輝きを失うだろう。しかし私をこの世から呼び出す神は　永遠にわたしのもの」。―とても深く大きな確信ですね。そして自分が神様から呼ばれ、自分もまた神様を「わが主」と心から言える、その恵みを歌っているのです。

この後歌う応答の讃美歌544番はこのように主を讃えて歌い始めますね。―「ああ嬉し　わが身も　主のものとなりけり」。心からアーメンと歌いたいと思います。この世界も、また私たちの人生も、闇が覆っているように見えることがあっても、そこだけ見ていてはいけないのだと思います。私たちは闇の中に置かれているのではなく、既にイエス様の光の中、主のものとして捉えられているのですから。

お祈り致します。

神様、“生まれつき目が見えない人”とは、私たち自身のことです。しかし、あなたはご自分から私たちを見つけ、声を掛け、どんな悪魔的な力が迫ってきても揺るがない平安を与えて下さいます。私たちの人生をそっくり背負って下さり、心から感謝致します！どうか、私たちもこの元盲人のように、心から御前に礼拝する恵みを、常にお与え下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン。